



TITLE:

京大広報 No. 173

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 173. 京大広報 1979, 173: 889-898

ISSUE DATE:

1979-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209515>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 173

京都大学広報委員会



文学部陳列館東側庭に保管されている舟形石棺

古墳時代前期（4世紀末頃）、豪族の埋葬用として用いられた（京都府八幡市八幡荘・茶臼山古墳から発掘）——関連記事本文9ページ——

目 次

昭和54年度入学者選抜学力試験の実施計画…………… 2

本部構内「白川道」の発掘調査…………… 2

海外訪問の感想（その3）

—東南アジア諸国を訪れて—総長 岡本道雄…… 3

＜随想＞

夢のまた夢……………名誉教授 武居 三吉…………… 8

＜紹介＞

文学部史学科…………… 9

＜大学の動き＞

昭和54年度入学者選抜学力試験の実施計画

共通第1次学力試験の実施に伴う昭和54年度入学試験については、総長を委員長とする入学試験委員会を中心に、実施計画の検討が進められてきたが、その主要な点は次のとおりである。

1 2段階選抜

(1) 2段階選抜を実施する学部

法学部、経済学部、理学部、医学部、薬学部および農学部

共通第1次学力試験の総得点が1000点満点中、400点以上の者を第1段階選抜合格者とする。

(2) 2段階選抜を実施しない学部

文学部、教育学部および工学部

2 第2次学力検査の期日および教科等

月 日	教 科	学 部	時 間
3月4日 (日)	国 語	理 学 部	午前9時30分～11時
		文・教育・法・経済学部	午前9時30分～11時30分
	数 学	文・教育・法・経済学部	午後1時～3時
		理・医・薬・工・農学部	午後1時～3時30分
3月5日 (月)	外国語	全 学 部	午前9時30分～11時30分
	理 科	理 学 部	午後1時～3時
		医・薬・工・農学部	午後1時～3時30分

3 入学試験場

学 部	試 験 場
文 学 部	教 養 部
教 育 学 部	教 養 部
法 学 部	法学部・経済学部
経 済 学 部	京 都 予 備 校
理 学 部	関 西 文 理 学 院
医 学 部	医 学 部
薬 学 部	薬 学 部
工 学 部	工 学 部
農 学 部	農 学 部

なお、入学願書の受理は、2月9日（金）から2月15日（木）までの間に各学部で行なわれたが、入学志願者数は次のとおりである。

学 部	募集人員	志願者数	倍 率	53 年 度	
				志願者数	倍 率
文 学 部	200人	732人	3.7	950人	4.8
教育学部	50	268	5.4	310	6.2
法 学 部	330	1,073	3.3	1,191	3.6
経済学部	200	675	3.4	811	4.1
理 学 部	281	979	3.5	1,022	3.6
医 学 部	120	410	3.4	667	5.6
薬 学 部	80	132	1.7	249	3.1
工 学 部	945	1,714	1.8	2,654	2.8
農 学 部	300	548	1.8	959	3.2
合 計	2,506	6,531	2.6	8,813	3.5

また、2段階選抜を行なう各学部においては、2月19日から20日の間に、上記計画に基づく第1段階選抜合格者の決定が行なわれ、2月26日までにその通知が各受験者に到着するよう配慮された。選抜結果は次のとおりであり、それぞれの合格者が第2次学力検査に臨むこととなる。

	志 願 者	合 格 者	不 合 格 者
法 学 部	1,073人	1,072人	1人
経 済 学 部	675	674	1
理 学 部	979	975	4
医 学 部	410	408	2
薬 学 部	132	132	0
農 学 部	548	547	1
計	3,817	3,808	9

＜部局の動き＞

本部構内「白川道」の発掘調査

京都大学構内遺跡調査会（会長 亀井節夫理学部教授）は、1月16日より、工学部イオン工学実験施設の建設予定地（面積約 400m²）で、かつて

の街道跡の発掘調査を行なっている。

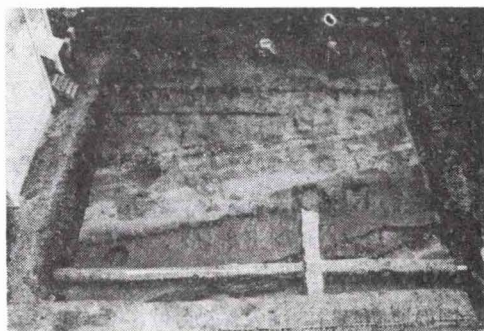
発見された道路は、通称「白川(街)道」「山中越」「志賀山越」などと呼ぶ旧街道の一部である。現在、荒神橋東詰から医学部構内の北縁に沿って東一条交差点に出、そこでとぎれて大型計算機センターの東方で再び現われ、北白川から白川の流

れに沿って山にはいり、峠を越えて大津・坂本方面に通じるルートがその街道である。幕末までの京都の町絵図などには必ず描れており、文久2年（1862年）に尾張徳川藩が、ちょうど今の本部構内にあたる範囲に屋敷を置いたため、白川道は分断されて藩邸内にとりこまれてしまった。明治3年（1870年）に、藩邸が廃されても道路は復活せず、土地はいったん田畑となり、そのまま旧第三高等学校が明治20年に継承することになる。

遺構は、巾 5.5m前後で、標高59.0m付近を東北東から西南西に向かって通じており、道路であった時代に積もった土砂が、驚くほど強く踏み固められている。その断面は、時の経過を示すように、30cmほどの厚みの間に幾層もの縞模様をみせる。幾層ものうちには、小石がびっしりと敷きつめられている路面もあり、そこを通過していた荷車などの轍の跡を無数にとどめている。

この道が、いつどのようにして形成されたかについては明らかでない点もあるが、今回の調査で発見した道そのものは、江戸時代の初め頃以降につくられた新道で、さらにそれ以前の旧道の北端と考えられる遺構を、5mほど南に、しかも1mばかり標高の低い地点で確認している。元来この付近の地形は、北から南にかなり急な勾配で下っていて、新しく普請された道路は、傾斜地を切りこんでつくられたことがわかる。旧道の路面上には、洪水でかぶったらしい砂礫があり、より安全な場所に道をつけ替えたものと考えられる。

新道の南約3mには、普請された当初から道と平行する水路があり、それを埋めた砂礫からは大量の陶磁器類を出土している。道路が姿を消した後、三高が創設されてもなお、流路だけはその構内に遺存していたことが、遺跡の上からも、明治時代の地図からもよみとることができる。さらに、鎌倉時代以前の流路も、発掘区の西北部で確認し



ている。

本部から北部にかけての京大キャンパスは、白川が運んだ砂礫が形成する扇状地上に立地し、現在、吉田山の東を南行する白川が、かつては北白川から吉田にかけても、しばしば流路を変えつつ流れていたわけで、「白川道」も、仕伏町の谷口から荒神橋方面まで、やはり一つの川の流れに沿って通じていたようである。

調査を開始して1か月後の去る2月15日、江戸時代の新道が明瞭に現われた時点で、現地説明会が催され、多数の方々の来場を得た。今回の調査は、3月末まで継続し、道普請された当初の形状や、その年代を追求するとともに、それ以前の旧道についても、限られた範囲ではあるが、調査を尽くす予定である。

なお、調査会では、北部構内理学部物理学科教室東側でも、只今発掘調査を実施しており、縄文時代の足跡を発見しているほか、土層中より土器以外にも夥しい植物遺体を採集するなど、過去数次にわたる調査とあわせて、旧石器時代から近世・近代に至る景観の変遷過程が次第に明らかになりつつある。

今後とも、こうした調査、研究をすすめるにあたって、皆様方の深い理解と協力をお願いする次第である。（埋蔵文化財研究センター）

海外訪問の感想（その3）

—東南アジア諸国を訪れて—

総 長 岡 本 道 雄

昨年12月18日から30日まで東南アジア諸国を訪れた。

一般に東南アジア（Southeast Asia）という言葉はインドシナ半島の諸国およびインドネシアと

フィリピンの両国を含む東アジア地域を指し、西からビルマ、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナム、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピンの9か国を指すとされているが、私が今回訪問できたのはこのうち ASEAN（東南アジア諸国連合）を構成するマレーシア、シンガポール、フィリン、インドネシア、タイの5か国と香港であった。

今回の歴訪の目的は大きく分けて3つあった。

その一つとして本学には、東南アジア研究センター、人文科学研究所のほか、各学部にも東南アジアの人文・社会、自然を研究対象としているものがある、それらの研究者はすべて相手国の当事者から格別の好意と便宜を与えられている。これらの関係各方面に感謝し、更に今後の援助を要請すること。

第二は、本学の外国からの留学生は、昨年10月現在で222人であり、そのうち、東南アジアからは68人來ている。東南アジアの留学生のこれまでの総数は233人であるが、これらの留学生がその帰国後母国で如何なる生活を送っているか、その実際を見るとともに、彼らから留学中の感想や更に希望を聞くことによって、今後の留学生の処遇改善の資としようとするものである。

第三は、昭和52年6月学術審議会は、「発展途上国との学術交流について」なる建議を行なった。これに基づいて、その趣旨実現の実際的な方法として、いわゆる拠点大学方式が打ち出されている。従来我が国の学術交流といえば、多くの場合相手は欧米の先進諸国であって、若干の分野を除けば、先進国の学術文化を吸収することが主であったので、発展途上国との学術交流というとき

の発想に根本的な転換が要る。そのような転換を得、更に主体的で積極的な意欲を持ってこれらの国との学術交流を行なうには、まず実際を見る必要があると考えた。

◇ ◇ ◇

今回私が訪問した大学・政府機関等と、面談した人々は次のとおりである。

香 港

The Chinese University of Hong Kong (中文大学) (1963年創立 国立)

学長: Prof. Dr. C. Ma Lin

University of Hong Kong (香港大学)

(1911年創立 国立)

学長: Prof. Dr. Rayson Huang Lisung

フィリピン

マニラ

University of the Philippines

(1908年創立 州立)

学長: Prof. Dr. Onofre D. Corpuz

Ateneo de Manila University

(1959年創立 私立)

学長: Rev. Jose A. Cruz

University of Santo Tomas

(1961年創立 私立)

学長: FR. Federico Femin. O.P.

シンガポール

University of Singapore

(1962年創立 国立)

副学長: Prof. Dr. Kwan Sai Kheong

インドネシア

ジャカルタ

Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia (L.I.P.I.)

(インドネシア科学院)

国際局長: Miss Moertini Admowidjojo

Directorate-General for Higher Education,
The Ministry of Education and Culture

(教育文化省高等教育総局)

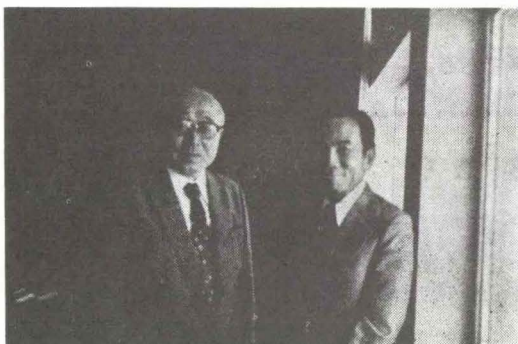
高等教育局長: Prof. Dr. Ir. S. Pramutadi

University of Indonesia (Universitas Indonesia)

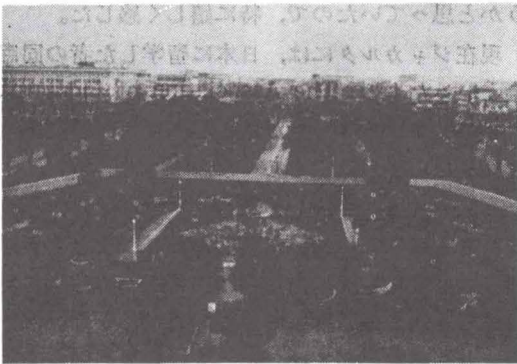
(1950年創立 国立)

学長: Prof. Dr. Mahar Mardjono

Bogor Agricultural University (Institut
Pertanian Bogor (I.P.B.))



香港大学長を訪ねる



セントトーマス大学構内

(1963年創立 国立)

学長: Prof. Dr. A. H. Nasution

京都大学東南アジア研究センタージャカルタ連絡
事務所

デンパサール

Udayana State University (Universitas Negeri
Udayana)

(1962年創立 国立)

学長: Prof. Dr. Ida Bagus Oka

ジョクジャカルタ

Gadjah Mada University (Universitas Gadjah
Mada)

(1949年創立 国立)

学長: Prof. Dr. Sukadji Ranuwihardjo

マレーシア

クアラルンプール

University of Malaya

(1962年創立 国立)

学長: Prof. Dr. Ungku Abdul Aziz

タイ

バンコク

Thammasat University

(1933年創立 国立)

学長: Prof. Dr. Prapasna Auychai

Chulalongkorn University

(1917年創立 国立)

学長: Prof. Dr. Kasem Suwanagul

(大学庁長官 Minister of state Universities)

Kasetsart University

(1943年創立 国立)

学長: Prof. Dr. Rapee Sagarik

評議会議長: M. C. Chakrabandhu

副学長(事務担当): Prof. Dr. Phaitoon Ing-
kasuwan

〃 (学務担当): Prof. Dr. Sutham Areekul

〃 (計画発展担当): Dr. Kamphol Adula-
vidhaya

The National Research Council of Thailand

(タイ国家学術研究会議)

事務局長: Dr. Sanga Sabhasri

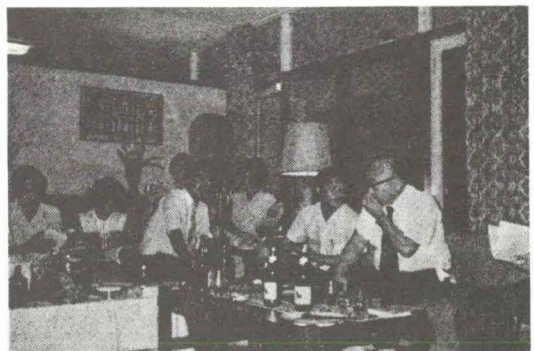
京都大学東南アジア研究センターバンコク連絡事
務所

◇ ◇ ◇

東南アジアの大学は一般に歴史は浅く、2, 3の大学を除き多くは30年そこそこである。しかし各国は、その建国の大きい柱として、また一国の文化面の顔をなすものとして全力をあげて大学の建設にはげんでおり、香港の中文大学、マレーシアのマラヤ大学、マニラにあるフィリピン大学、シンガポール大学等、広大なキャンパスに欧米の大学にもおとらぬ新大学を建設している。なお旧キャンパスにあるものも、広大な土地に移転すべく、設計模型を示してその夢を語ってくれるのが常であった。

これら大学は単に建国の顔といった面のみでなく、実質的にも建国の中核の人材を育成する世界にひらかれた宝庫として尊重されており、その研究者は社会のあらゆる方面にわたって実際に活躍していて、これら発展途上国の社会にとって中核的存在であることがうかがわれた。

このような一国の建設における大学への期待は、各国それぞれの国家としての成熟と共に、全世界におけるその共通な位置付けを自覚し、ASEAN 5か国が一致団結してといった観点からも大学に



かつて京大に留学した人達と歓談(バンコク)

向けられている。マラヤ大学の Aziz 学長の提唱する ASEAN 大学がそれである。

この提案は ASEAN 各国バラバラでなく、一体としての将来に展望を持ったマンパワーづくりを計画したもので、約 500 人の学生を持つ大学院大学をボルネオ島の北西隅のラブアンに設けようというものである。この地点はマニラ、バンコク、クアラルンプール、シンガポール、ジャカルタのいずれからもほぼ等距離にあり、いうならば ASEAN の中心部にあたるわけである。100人の教員のうち40人は大学固有の教員、40人は ASEAN 各大学の教員が1~3年の期間を決めて出向する。20人は短期の客員教員である。

その実現はなお遠いようであったが、ASEAN 諸国が丸一となって世界に伍して行こうとする意欲としては注目すべきであると思った。

◇ ◇ ◇

ジャカルタとバンコクでは、かつて京都大学に留学し、現在は両市に住んでいる人達と会食する機会を持つことができた。

すなわち、ジャカルタでは、インドネシアからの留学生35人のうち6人、またバンコクではタイからの留学生38人のうち13人が集まってくれ、それぞれ楽しい一時を共にすることができた。偶然であろうと思うが、ジャカルタでは企業に勤務している者が多く、バンコクでは13人のうち6人が大学教員であった。主に国費の留学生であったが、京都大学出身者は就職についても困難はない様子で、それぞれの現在の生活に満足しており、京都大学へ留学したことを喜んでくれていた。そのような恵まれた人々のみが集まったということも考えられようが、相当きびしい要求も聞かされよ



チュラロンコン大学

うかと思っていたので、特に嬉しく感じた。

現在ジャカルタには、日本に留学した者の同窓会といったもの The Association of Indonesia Alumni from Japan があるが、京都大学同窓会を作りたいとの希望もあった。

◇ ◇ ◇

彼らとの懇談において話題となり、また各大学長との懇談でもよく出たのは、日本への留学に関して日本語の難しさと学位の問題であった。

これらの国の多くは、かつては欧米の国を宗主国として持っており、それら旧宗主国は東南アジア諸国の指導者を自国で養成した訳である。したがってこれら大学の中枢部は、その90%以上が欧米の大学院で学位を得たものである。例えば、タイのカセサート大学の学長・副学長等の9人中7人まで、また14人の学部長と研究所長中13人までが、アメリカの大学院で学位を得た者である。

したがって、学術文化の面では勢い欧米志向であることは否定できない。前述の ASEAN 大学にしても、その図書館計画の中の文献は、英語、母国語、ヨーロッパ語のものとなっている。

今のところ企業に従事する便利さの上から日本語を習得しようという希望はあるし、また政府レベルで各大学に日本語講座を設けるなどして奨励はしているものの、本格的に日本語を学んで日本の学術文化を吸収しようという意欲は、欧米に対する程は強くないのではないかと考えられた。過般国立大学協会が招待したフィリピン大学の三学長も、英語で日本の学術を習得できる大学を作ってくれないかということであった。留学ということを単に知識技術の習得だけでなく、その国の国民と文化全般に接することであると考えてきたので、このような近視眼的な要求には必ずしも満足できなかった。しかし、これには先方の無理からぬ事情があるのであって、近時民族意識の高揚のために母国語を重視しているとはいうものの、香港、フィリピン、シンガポールの大学では英語を用いており、また母国語を基本としているマレーシア、インドネシア、タイの大学にしても、母国語は学部レベルが主で、大学院では英語が用いられている。このような実情で、習得は困難で、しかも卒業後実用の領域の狭い日本語を学習することに対して、積極的でないとしても理解できる

ところである。

この点、どこまでも留学の基本は他国の文化全般を学ぶところにあるとの原則に立って、日本語の習得を求めるか、それとも彼らの現時点での実的な要求に応じて、英語で教育を行なうかは、分野による違いを考慮した上で慎重に考えねばならぬ問題である。



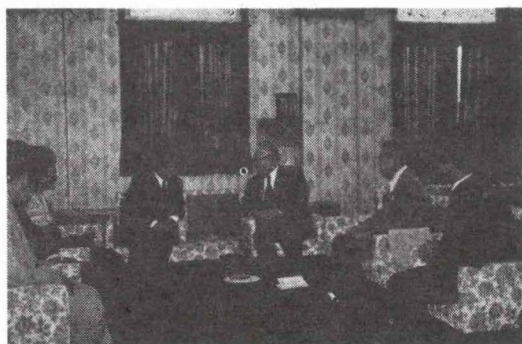
日本への留学についてのもう一つの問題は、日本の大学における学位取得の困難さである。

彼らが外国に留学して帰国し、自国で就職するとき、その取得して帰った学位（修士、博士号）は重要な役目を持っている。特に博士号の有無は大きな違いであり、教授職につく場合もその条件となっている。アメリカでは従来から博士号は大学院コース修了の証書といった意味で授与されているが、日本では博士号は、その専攻領域で独創的研究を完成した人に与えられる称号であるとする伝統が新制の大学院制度に移行した後もなお根強く残っている。このため分野によっては、学位を得ることは今日なお極めて難しい。例えばこれまで東南アジアから京都大学に留学した200人余りの学生で博士号を得た者は9人である。このことは只今、日本留学についての彼らの最大の不満の的となっている。

これについては、日本の学位はすでに昭和50年の大学設置基準改正の省令をもってアメリカ的のものに制度的には転換しているのであるから、その実行を待つのみであるといえるかも知れないし、また各方面でその実行が強く要望されているのが実情でもある。しかし、留学生の学位取得を容易にすることで学位本来の目的からそれたり、またひいては日本の学術水準そのものの評価を低くすることがあってはならない。したがって、適正な学位レベルを維持しつつ、新しい制度の実施へと移って行く慎重でかつ柔軟な配慮がのぞましいと思う。



このほか、日本と東南アジアとの学術交流のため、拠点大学方式というのがある。目下のところ東京農業大学と大阪大学工学部（醸酵工学）とが日本側の拠点大学となっており、共に日本学術振興会を通じて、それぞれタイのカセサート大学お



タマサート大学長と懇談

よびインドネシアのボゴール大学を中心とする大学群との恒常的な学術交流を核として、交流の輪を拡げて行こうというものである。これら双方の大学間で目下精力的な準備が進められている。

このような学術交流の基盤としてのこれらの国に対する日本政府の援助については、フィリピン大学の経済学部には図書館が寄付されており、またタイのタマサート大学へは日本から1978年度13億円にのぼる熱帯農業研究計画の資金が贈られ、感謝されている。また各主要大学に日本語講座の寄付が行なわれているのを見ることができた。

以上東南アジアと日本との学術交流の現況を見て痛感したのは、次のようなことである。

このことは中国とても同様であるが、東南アジアの各国は、建国の柱として、学術教育制度の確立と充実をいそいでおり、その実現を計るとき、日本を含め欧米各国を比較検討し、その中の最も秀れたものを探って自らの範としようとしているのである。言うならば、各国をきびしく比較考量しているのである。この実情は明治の日本政府が、我が国の学校制度の創設にあたって、最後にドイツの制度を採用することに落ちついたが、それまでに初めフランス、次にアメリカ、更にドイツと、10か年にわたり試行を重ねた事情に似ている。

この点期せずして、また思いがけないところで、日本の学術研究体制とその成果が世界各国との比較において、試されるといった事態を目のあたりにする思いがした。

その際比較といってもその中では、同じく東洋の一国として、明治維新後100年、西欧の学問を

『史林』の刊行をあげるだけで十分であろう。

なお、最近の史学科にとって特筆すべきことは、1966年（昭和41年）に新しく現代史学講座が、続いて1968年（昭和43年）には西南アジア史学講座が設置されたことである。史学科にとっては、実に半世紀ぶりの講座の新設であった。前者は、国史・東洋史・西洋史という在来の専攻にかかわることなく、変転する20世紀世界史を扱い、後者は東西両洋のあいだに独自の世界を形成する西南ア

ジア史・イスラム史を扱う。まだ両者ともおのおの一講座の設置にとどまってはいるが、学部附置内陸アジア研究所（羽田記念館）との連繋が緒についていることを指摘しておきたい。

史学科創設以来、永く当該学科各専攻の研究室は陳列館にあったが、現在この陳列館は国史学・地理学・考古学など、各専攻分野の史料、遺物を収蔵する学部附置博物館相当施設となっている。

（文学部）

